



# お手をどうぞ

Code:Realize ～創世の姫君～  
ルパン× カルディア

## CONTENTS

ご主人様、ご命令をどうぞ 4

踊りましょう 11

お手をどうぞ、お嬢様 14

ひたすらルパカルがいちゃいちゃしてます

ご主人様、ご命令をどうぞ

「じゃーん！ 今日のメインはなんと！ カルディアちゃんの手作りです」

意気揚々とインピーが声を上げ、得意げにふんぞり返っている。

本日の夕食はルパン、フラン、サン、ヴァン、そしてインピーとカルディアにシシイ、いつもの六人と一匹、全員が揃っていた。

各自の前に置かれた皿には、ローストビーフが丁寧に盛りつけられていた。肉の中央部分は鮮やかなロゼの色で、縁には綺麗に焦げ目が入っている。かかっているグレイビーソースの艶も美しい。付け合せの野菜も緑や橙色が生き活きと輝き、傍らにはほどよくキツネ色に焼けているヨークシャー・プディングが添えられていた。

「おお、すげえな！ 旨そうじゃねえか」

「本当だ。本格的に作ったんだね」

「ええ、おいしそうです」

「ふむ、なかなかじゃないか」

口々に声を上げるみんなに、カルディアはインピーを手

伝って皆にパンを配りつつ「ありがとう。でもインピーが教えてくれたおかげ」と微笑んだ。

その彼女は、いつもとは違った服装をしていた。初めて見る姿だ。

黒のシンプルなロングドレスに、真っ白なカラーとカフス。そして、白いフリルのついたエプロン。頭にもやはりフリルのついたカチューシャ。よく見ればエプロンもドレスの生地も上等なもので、カラーにもエプロンにも繊細なレースが付いていて、実際のメイドが身に纏うものよりはるかに上等なものだ。だが。

どう見ても、これはメイド服。

なぜカルディアがメイド服を着ているのだ。

ルパンたちの視線が、やに下がった顔でカルディアを見つめるインピーに向けられた。

「こら、インピー」

ルパンの低く地を這うような声をものともせず、インピーは視線をカルディアから外そうともしない。

「いやあ、カルディアちゃんつてば、やつぱかわいいからさ、何着ても似合っちゃうんだよねえ。おまけに料理上手！」

こいつに何言っても無駄だ。悟ったルパンは、次にフランを睨んだ。

「おい、フラン」

彼女が着ていられるということは、防毒を施された服、

踊りましょう

「ねえ、おかしくないかな？」

鏡越しにシシイに尋ねると、シシイはワンと鳴いてくれた。おかしいのか、おかしくないのか、どっちだろう……。

カルディアは先日仕立て上がったばかりのドレスを着ていた。

あの時カルディアが選んだ白いドレスに、さらにルパンが仕立て屋であれこれと注文を付けて、「まあこれならいいか」と許可をもらったドレスだ。結局色も「いや、白はウエディングドレスの時に！」というルパンの主張により、淡いクリーム色に変えられていた。首元にもかわいらしいレースの襟がまかれ、当初のデザイン通りであればホロロギウムが見えるほど大胆に開いていた胸元は、ルパンの指示により大きなリボンで隠されている。ルパンが許可してくれただけあって、このドレスもかわいい。

ドレスはかわいいけど、似合っているんだろうかと、少し不安になる。

今日は船の進水式とその後にはパーティーがある。進水式、

ルパンの「でっかい船が水面にドバツ」というぎっくりとした説明では、何も分からなかった。どんなものなのか、とても楽しんだ。

問題はダンスパーティーの方だ。ダンスはルパンに散々教えてもらった。サンにも練習に付き合ってもらっていたら、なぜかルパンに怒られてしまい、結局ルパンにのみ負担をかけることになってしまった。でも、多分、ダンスは大丈夫。

問題の一つは、そんな本格的なパーティーになんて行ったことがないこと。

マナーも皆に教えてもらったけれど、ビクトリアも出席するような上流階級の間ばかり集まるような場所に行ったことがない。失敗をしてしまわないかどうか、とても不安だ。

さらに、より大きな問題がもう一つ。

ルパンと二人きり。

この屋敷では、相変わらず皆が一緒にいて、毎日が賑やかで楽しい。ルパン一味に加えて、ドラちゃん、そして時々遊びに来るシオルメ。なぜかレオンハルトも顔を出すことがあるのだ。だから、ルパンと二人きりになることなんて、ほとんどない。

先日のダンスの練習の時は確かに二人きりだったけれど、先生モードのルパンは泥棒の技術を教えてくれた時と

お手をどうぞ、お嬢様

「ルパン？」

お茶に誘おうと思い、カルディアはルパンを探して屋敷の中を歩いていった。ルパンの寝室を最初にノックしたけれど、返事はなく、部屋を留守にしているようだった。

広間にも応接室にも談話室にもいない。食堂にも書斎にも画廊にも撞球室にも、どこにも彼の姿はなかった。

彼がカルディアに黙って、どこかへ出かけてしまうことはないはずだ。

サンのたくさんの骨董品で埋められた幾つもの部屋のどこかにいるのかもしれない。一つ一つの部屋を覗いていくのは大変だ。それに、時間がかかればせっかくな焼いたスコーンが冷めてしまう。

途中で出会って、そのままカルディアの後を追いかけてきたシシイに「ルパンどこかな？」と尋ねてみる。ほとんど独り言のようなものだったが、シシイはクウンと一声鳴いて歩き出した。少し歩いて振り返り「ついてこないの？」という顔をする。

「シシイ、ルパンの居場所知ってるの？」

ワン！ と肯定するように鳴いてトコトコと歩き出すシシイの後を、カルディアは追うことにした。

シシイは温室の中へと入っていく。

庭にある本格的なオランジェリーではなく、本館の一番端、庭に迫り出したガラス張りの屋根と大きな窓を持つ応接室、コンサバトリーの方だ。客人をもてなしたり、家人がくつろぐための場所。テーブルと座り心地の良い椅子が置かれ、木々の緑や色とりどりの花々を楽しみつつのんびりと過ごすことができる。カルディアも大好きな場所だ。よくここで本を読んだり、みんなに手紙を書いたりしている。

今日も大きな窓から、ガラス越しに明るい光が降り注いでいた。たくさん置かれている植物の葉が、宝石のように輝いている。庭に植えられているバラもそろそろシーズンなのだろう、赤や白、黄色にそれぞれ咲き誇っている様子が見えた。

開けられた窓からはほどよく風が吹き込み、ともすれば熱くなりすぎる温室内の空気を適度に入れ替えてくれる。

やや伸びすぎた木の葉を払いのけると、温室の奥に、ルパンの足が見えた。庭を見ているのだろうか、こちらからは椅子に隠れて彼の姿は見えない。

ルパンに近づけば、彼の様子がようやく見えた。

ルパンは庭を眺められるように置かれた椅子に、どっか